戦争継続の意思

日本の指導者は、望みのない戦争をなぜやめようとしなかったのか

一九四四年（昭和19）6月4日、ヨーロッパ戦線で、連合軍のノルマンディー上陸作戦が成功。その二か月後にパリがドイツ軍の占領から解放され、ドイツ軍の劣勢はだれの目にも明らかとなっていた。

この間に日本もアメリカ軍のサイパン島上陸をゆるし、さらにはマリアナ沖海戦で大敗北を喫する。「絶対国防圏」に大穴をあけられたことになったのである。

連合国の攻勢に一方的な防戦を強いられ、しかも戦争遂行能力はすでにつきていたのに、日本の戦争指導者たちは、なぜ戦争終結への方策を考えようとはしなかったのだろうか。日本はドイツが降伏（一九四五年5月）した後も、三か月余のあいだ、一国だけで連合軍との戦いをつづけていくが、そのような厳しい条件下であえて戦争継続の意思をつらぬこうとした背景には、いったいなにがあったのだろうか。

失われた戦争終結の機会

サイパン島の陥落とマリアナ沖海戦の大敗北による「絶対国防圏」の破綻は、戦争指導者に衝撃をあたえ、*1陸海軍内部からも戦争終結への動きが浮上する。同時に、日米開戦以来、独裁的な権限をふるってきた東条英機首相への不満が一気にふきだした。こうして、東条内閣打倒工作が重臣・宮中グループを中心に本格化する。

戦争継続を一貫して主張する東条内閣の打倒工作は、ただちに戦争終結への道がひらけることを意味するかに思われた。軍事・経済両面ですでに国力が限界にたっしていることもあって、東条内閣の崩壊は、戦争終結の動きに弾みをつけるものと予測されたのである。

昭和19年7月東条内閣がたおされ、朝鮮総督だった小磯国昭が中央によびもどされて首相となる。しかし、小磯も東条の人脈に属する人物にすぎず、小磯内閣は、戦争終結への動きを完全に封じていく。同年9月7日に開かれた第八五回帝国議会における施政方針演説で、小磯首相は戦意の高揚と必勝国家態勢の確立、戦力の

＊1　たとえば、大本営陸軍部第二〇班（戦争指導班）の班長松谷誠大佐らは、7月2日に「作戦的に大勢挽回の目途」はすでになく、「速みやかに戦争終結を企図するを可とする」とした結論にたっしていた（大本営陸軍部第二〇班『大本営機密戦争日誌』防衛庁防衛研究所戦史部図書館蔵）。

＊2　『現代史資料（大本営）』第三七巻、みすず書房、一九六七。

＊3　天皇は8月23日の地方長官会議で、「汝等地方長官宜しく一層奮激励精衆を率い官民一体戦力を物心両面に充実し以て皇運を扶翼すべし」と発言。9月7日の第八五回臨時帝国議会の開院式でも、「敵の反攻愈々熾烈にして戦局日に危急を加ふ皇国が其の総力を挙げて勝を決するの機方に今日に在り」とする内容の勅語を発していた。

増強などを主要項目にかかげ、戦争継続の意思を明言したのである。

これより先、小磯首相は、戦争指導体制を強化するため、首相・外相・陸相・海相・参謀総長・軍令部総長からなる最高戦争指導会議を設置。同会議は8月9日、「今後採るべき戦争指導の大綱」を決定する。そこでも陸海軍の総力をあげ、アメリカ軍に決戦をいどむことが明記されていた。

それで、国民の戦意高揚のために「国体護持精神の覚醒」が強調され、「飽迄も戦争の完遂を期すること」がもとめられた。戦争目的を「皇土」の「護持」の一点にしぼり、国民を絶望的な戦いにかりだしていくことになる。[*2]

固い天皇の戦争継続意思

こうした小磯内閣の戦争継続意思をささえていたのは、昭和天皇であった。天皇は戦局の悪化に深い憂慮の念をしめしてはいたが、一大戦果をあげないうちはけっして戦争終結はしない、[*3]という頑なな態度をくずしていなかった。戦局の悪化を十分に知る立場にあったものの、天皇はあえて無謀な戦争継続の道をえらんだのである。

戦争継続が天皇の勅語というかたちで再三にわたって明言されたことは、戦場における兵士たちを絶望的な戦闘へとおいこみ、甚大な犠牲を強いることになっていく。そればかりか敗北の連続のなかで、くりかえし天皇の勅語がだされたことは、戦争終結を公然と口にできる雰囲気そのものをうばっていったのである。

戦争継続が日本を破滅の道においやり、それが「国体護持」の危機につながることをおそれた近衛文麿は、昭和20年2月14日、天皇に「近衛上奏文」[*4]を提出し、戦争継続の意思の変更をせまった。これに天皇は、「もう一度戦果を挙げてからでないと中々話しは難しいと思ふ」とこたえ、否定的な見解を明らかにするだけで、戦争継続の意思をくずそうとしなかった。

昭和20年初頭の時点で日本の敗北はすでにさけられない状況にあった。だが、それにもかかわらず天皇は戦争継続の意思をかえず、後に沖縄戦や広島・長崎への原爆投下の悲劇をうむことになる。戦争終結への道を思いとどまらせたものこそ、じつに天皇の国体護持への執着であったといえよう。

（纐纈　厚）

＊4　「近衛上奏文」には、「敗戦は遺憾ながら最早必至なりと存候。以下此の前提の下に申しのべ候。敗戦は我国体の一大瑕瑾たるべきも、英米の世論は今日迄の所国体の変更とまでは進み居らず。随つて敗戦だけならば、国体上はさまで憂ふる要なしと存候」と記され、敗戦よりも、敗戦を機会に共産主義革命がおこり、国体破壊にまで行きつくことが危惧されていた（外務省編『日本外交年表竝主要文書』下巻、原書房、一九六六）。

参考文献
山田朗『昭和天皇の戦争指導』昭和出版、一九九〇。
山田朗・纐纈厚『遅すぎた聖断』昭和出版、一九九一。
吉田裕『昭和天皇の終戦史』岩波新書、一九九二。